

1 取り敢えず鏡に見せる赤いブラ

「取り敢えず」という表現で、いずれ誰かに見せるという意思を匂わせている。状態を表す副詞を用いることで、その「思いを匂わせる」手法の一つとして覚えておきたい。ただし、状態や程度を表す副詞（ゆっくり、たいてい、しばらく・・・）は音字数も多く、扱いによっては直接的な説明になることもある。

2 外道とはひどい釣られてあげたのに

言葉が持っている「関連していない複数の意味」を利用した作品。川柳は通常、傍点を打ったり、ルビを振らないため、このような手法を試みる場合、漢字・カナ表記に悩む場面がある。

3 ちゃぶ台に相談してる原節子

固有名詞を用いた作品は、作者の想定する要素と、読者のそれが一致するかどうかという問題がある。原節子さんは、かつて「永遠の処女」と謳われた大女優。多くの出演作がある中で、上五、中七で表現されている場面が、作者と読者でどの程度一致するか、であろう。

4 ひとひらの さくらによせる わがおもい

下五「わがおもい」だが、じっさいはその「思い」をどのように表現するかに作句の妙がある。全体が平仮名表記であるため、読み手の中に入りやすく、読み手の思いを乗せやすいといえるが、その分作者の手から離れてしまうともいえる。その可否は作者の判断になるが・・・

5 地下鉄で地震に会うとどう逃げる

答えはおそらくあるのだろうが、改めて問われると、という意外性を突いた作品。確かに「意外性」は句の材料になるが、「捻り」的なものも欲しいところ。

6 プッシュユでもプルでも開く無節操

5に比べてもっと当たり前のことを扱っている。句の形を比較すると、5は投げかけ、6は断定。しかしこの断定によって当たり前のことが改めて「発見」として読者に伝わる。

7 親孝行親不孝よりむつかしい

相反するものを並べ、そこに作者の思いを加えることで、対象物の差を際立たせている。対比という手法は対照物の是非を強調し肯定するのではなく、否定的表現で

決着させることで、是非のねじれを発生させるほうが、インパクトのある作品に仕上がる。

8 天下りとかけて渡り鳥と解く

謎かけの題の形を取り、「その心は」の部分共有することを目指した作品といえる。いわゆる問いの形式を踏襲しているため完結性に乏しく、一句としての独立性に疑問が残る。

9 今日明日と言えぬ積木の知恵を見る

「積み木の知恵」というのが発見であるのと同時に、難解さの元でもある。しかし、何度か読んでいくうちに句意は見えてくるわけで、「読明快」でなければ解らない句とするのは読み方として正しくはない気もする。「読み」を考えるきっかけとしたい。

10 花道を忘れていない散る桜

桜が散るという当然の事柄と、人生を示唆する言葉との対比。「忘れていない」のは桜。では「忘れていないのは」というところに作者の思いがある。書かないで匂わせる手法として検証したい。

11 この膝の傷が解せない二日酔い

下五は座五とも呼ぶように、下五の表現で句がしまる場合が多い。特に「軽味」「おかしみ」を表現する場合、下五の表現は重要。

12 人知れず無縁仏に手を合わせ

通常無縁仏は山野にあるわけではなく墓地に存在する。そこで「人知れず」という状況が作者の思いと作品世界を広げていく。無縁仏に対する、作者と読者の理解に差があるかどうかを検証したい。

13 原色で誘うチラシの超目玉

「原色」と「超」という修飾語が二つある点について、読み手が受ける印象からその効果を検証してみたい。

14 張りぼての爪が炊いてる無洗米

状況から下五「無洗米」が必然性を持つてしまう。「炊いている」が「磨いでいる」だと前提から無理が出る。「張りぼての爪」という表現は発見だが、その後の表現が目新しさを感じないところももったいない。

15 首都高に喰われちまった歩道橋

風景なのか、事象なのか、どちらとして理解するかによって印象が違ってくる。風景なら、そこから中七の思いを鑑賞することになるが、事象なら時事的な事柄を知らないという理解できない。二つの事柄の対比、組み合わせ

には読者がどう捕らえるかについての推敲が必要となるが、あまりそのことを重要視すると、「思い」が薄れてしまうことがある。

16 花びらが ほろ酔い面に 舞い降りて

「面」を（つら）と読むのには、句全体を通しての言葉遣いとのギャップを感じて少し抵抗がある。では（めん）と読めばいいのかというと、微妙。例えば「ほろ酔いの頬に花びら舞い降りる」というところから、推敲をスタートさせるとどうだろう。

17 千年の夢から覚めて花の下

夢を見ていたのは誰、覚めたのは誰、花の下で覚めたのか、覚めてから花の下へ来たのか、読者がどう読むかのヒントは「千年の夢」という喩。読者が「誰」は「読者自身」としても鑑賞に耐えうる作りは、命題から座五へ導く手法とは違った可能性を見せる。

18 凜としてその日暮しに甘んずる

下五の意味を「清貧云々」というニュアンスでとってしまつと、上五とのずれが生じる。ここは「楽しむ・満足する」という用法で理解したいところ。作句時も辞書は離せないが読む場合も辞書を活用したいものである。

19 忙しいそう思う時花のうち

下五が少々言葉足らずか。「そう言う内が花」という意味か。そうだとすると、もともと「待つうちが花」「待つ間が花」からきた用法の流用になる。例えば「忙しいうちが花だった」と状況を過去形とし、「花の日もあつた銀座」という通り」などの創りもあつたかと思う。

20 泣くための胸を妻には借りられず

川柳に形式上の「切れ」はないが、「胸を」を「胸は」とし、いったん切ることで思いが前後に掛かるような手法もあつたのでは。「胸は」「妻には」という「は」の重なりを嫌つたのかもしれないが。

21 ジャンプ傘。パチンと閉じて恋終る

関連性のない事柄を重ねることによって世界を広げる手法。ここはジャンプ傘を持つてきたところが手柄。

22 老いふたり裏も表もない帳簿

裏帳簿というと、あまりよいイメージがないが、それがないことで、正直・清貧等のイメージが喚起されると同時に、表もないという意外性がこの句の手柄。

23 菜の花を手折つて仰ぐ空の色

空の色は表現されていない。しかし、どのような状況で空を仰いだのかは表現されている。これは作者の世界。しかし同時に、表現されていない空の色によって、読者がそれぞれの世界を導くことを否定していない。この下五の喩は興味深い。

24 妻も言う私が先に逝きますと

「も」の対象が句の中にある場合と、外にある場合を比較する上で参考なる作品。「僕も妻も」という表現より、言外に自身を置くことで句姿が平易になり、読者の中に入りやすくなる。

25 言葉出ず席を譲つてはにかむ目

言葉が出なかつたのは誰、席を譲つたのは誰、はにかんだのは誰、と見ていくと、すべて同じ人物で、外に席を譲られた人がいるが、その像が見えてこない。つまり状況が多すぎるということになる。

26 もういいよそんなに薄くしなくても

昔は重厚長大、その後、軽薄短小などと産業構造の変化が表現されてきたが、この作品の「薄く」から読者は何を想定するだろうか。例えば携帯電話など日常的に使用されるツールの薄さなのか、教科書の中身などといった比喩としての事柄なのか、色々と考えることで読者が楽しめるという側面と、何を薄くするのか判らない、という疑問を抱いたままになるのか、その状況に作者がタッチできないでいる。

27 社会面衝動的という病い

「社会」ではなく「社会面」。この違いで解釈が違ってくる。つまり「衝撃的な事件が数多く起こる社会」と「衝撃的という言葉で飾り立てる紙面」作者の想定はどちらだろうか。

28 街に出て生きた証を拾いたい

まず読み方として、「街に出ない」とはどういうことか、「生きた証が得られない状況」とはどういうことか、と逆に置き換えて鑑賞すると、作者の思いと、広がり共有しやすい。句の読みとしての検証に役立てたい作品。

29 入学を祝つて桜歩を合わせ

今年のような気候ではタイムリーといえる。時事ではないが即時性の高い作品。下五の表現が手柄。テーマとしては良くあるものだけに、即時性がキモといえる。